

特許検索競技大会2013の新たなチャレンジ —IPCCによる特許調査人材の育成—

New Challenges of Patent Information Retrieval Contest 2013

一般財団法人工業所有権協力センター 企画室事業推進部

岩間 雅生

PROFILE: 平成21年4月入団。事務局総務部を経て、平成25年4月より現職。

1 はじめに

特許検索競技大会については、本誌においても過去数回紹介されてきた。¹ この大会は、2007年度から始まったもので、2008年度からは独立行政法人工業所有権情報・研修館（以下「INPIT」）が主催となり、その後、5年間開催されてきた。

そして今年度、共催として大会に参画してきた一般財団法人工業所有権協力センター（以下「IPCC」）が、本事業を主催することとなった。

IPCCにとって初の開催となる“特許検索競技大会2013”は、10月26日（土）に開催する予定となっている。今大会は、大会の名称こそ変えてはいないが、これまで主催してきたINPITの経験を継承しつつ、大会実行委員会による運営のもとで、より魅力あるイベントとするための様々な工夫を盛り込んでいる。

本稿では、これまでの特許検索競技大会（以下「本大会」）の歩みを振り返り、本大会事務局からみた特許検索競技大会2013の新たなチャレンジについて、私見を交えながら紹介したい。

2 これまでの特許検索競技大会の歩み

2.1 背景と意義

企業において事業戦略、知的財産戦略、研究開発戦略の三位一体の戦略構築が重要であることは言われて久しいが、優れた戦略を構築するためには、事実情報の正確な収集と分析が前提としてあることは言うまでもない。即ち、事業戦略であれば自社の強みや弱み、競合他社の動向、市場の動向、代替技術の動向等の事実情報を収集し分析し、これらを踏まえ策定されるものである。知的財産戦略や研究開発戦略を構築する場合は、事実情報の一つに特許情報が含まれるから、世界中の膨大な特許情報の中から有益な情報を漏れなく抽出する必要がある。このためには、サーチエンジンを選択して操作し特許情報の集合を作り、そしてミクロの視点で特許情報を分析して有益な情報のみを、迅速かつ的確に抽出することができる高度なスキルを有する特許調査人材（以下「サーチャー」）の存在が不可欠である。

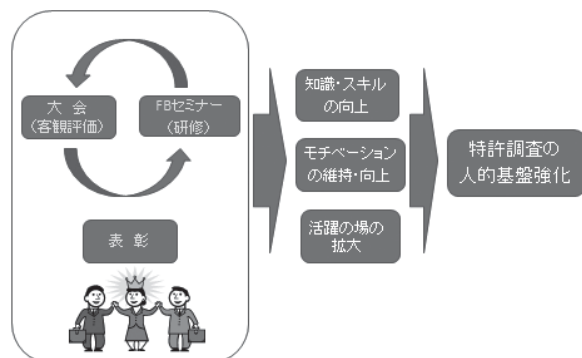


図1. 特許検索競技大会の意義

1 Japio YEAR BOOK2009 pp100-103
Japio YEARBOOK2010 pp118-123

表1. 特許検索競技大会の過去5年間の変遷

開催年度	2008	2009	2010	2011	2012
参加人数	86名	85名	169名	148名	162名
DB数	15	16	17	16	15
技術分野数	3分野	4分野	5分野	5分野	3分野
技術分野名	電気・機械 化学 バイオ・医薬・食品	電気 機械 化学 バイオ・医薬・食品	電気・ハードウェア ソフトウェア・IT 機械 化学 バイオ・医薬・食品	電気・ハードウェア ソフトウェア・IT 機械 化学 バイオ・医薬・食品	電気ハード・ソフト 機械 化学・医薬
表彰者数 (対参加人数比)	3名 (3.5%)	4名 (4.7%)	8名 (4.7%)	7名 (4.8%)	5名 (3.1%)

この認識の下、本大会は、サーチャーの実務能力、即ち単に知識を持っているだけではなく、その知識を活用して迅速・的確に実行できるスキルを持っているかを客観的に評価することを目的としている。

更に、本大会に加えて、大会後にフィードバックセミナーを一体で開催することにより、知識・スキルの向上効果を高めている。また、特に成績が優秀な者を表彰することにより、表彰された者は活躍の場の広がり期待でき、表彰されなかった者は次回に向けてのモチベーションの維持・向上が期待できる。このように本大会は特許調査の人的基盤の強化を図ることにより、我が国のイノベーションの創出に寄与することを目指してきたものである。

2.2 過去5年間の本大会の変遷

2008年度から2012年度までの本大会の変遷を表1に示す。

参加人数をみると、2010年度に倍増している。

これは、東京会場を INPIT 内の教室から、より広い外部会場に変更したことによる。DB数については、当初から協賛プロバイダーの理解と協力により、ほぼ一定である。

技術分野数については、2008年度から2011年度にかけては数を増やした。しかしながら、分野間の難易差の調整をしやすくするため、2012年度から電気ハード・ソフト、機械、化学・医薬の3分野に戻す一方で、技術分野に特化した難解さを排除した内容としている。

表彰者については、特に優秀な者を表彰する方針としていた。結果として毎年度若干名の表彰となり、参加人

数に対する表彰者数の割合は約3～4%台にとどまっている。

2.3 INPIT による調査研究報告

2011年度に INPIT は、「特許調査従事者の現状と今後に関する調査研究」報告書²を作成した。

この報告書において、サーチャーのレベルと標準スキルを明確にしている。

サーチャーのレベルについては、図2に示す通り、三段階に分けられている。

- ① レベル1：見習い「補助を受けながら初歩的な調査を遂行できる」
- ② レベル2：一人前「目的に応じて最適な特許調査ができる」
- ③ レベル3：熟達者「高度な特許調査に対応できる」「情報依頼部署に提言・提案ができる」

レベル3の熟達者については、アナリスト型、エキス

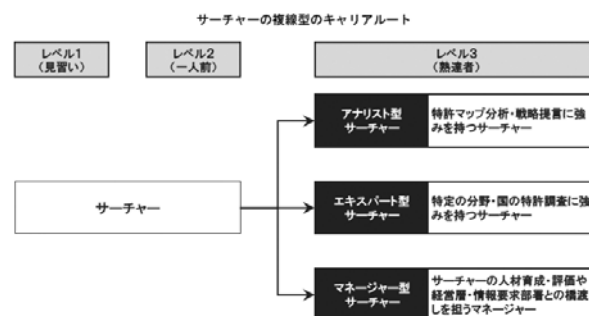


図2. サーチャーのレベル（「特許調査従事者の現状と今後に関する調査研究」INPIT 報告書より抜粋）

2 INPIT の HP
<http://www.inpit.go.jp/jinzai/topic/topic100011.html>

パート型、マネージャー型の3つの複線型のキャリアルートが例示されている。

一方で、レベル1の見習い、レベル2の一人前については、どの企業であってもその人材像に大きな差はなかった。したがって、レベル3については、企業毎の育成が必要と思われるが、レベル1、レベル2までの育成については、研修、教材等の育成ツールを共通化することができるといえる。

図3には、それぞれのレベルに求められる専門的な知識とスキルが示されている。

レベル1は、ステータス調査や国内出願前調査などの能力、そしてレベル2は、外国出願前調査や無効資料調査、国内抵触調査などの能力が示されている。

このように、本報告書では、サーチャーのスキル標準が明確に示されている。

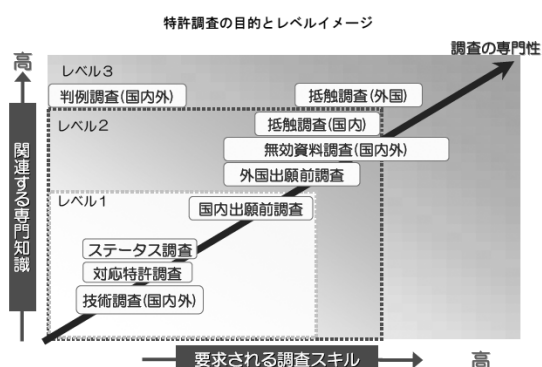


図3. 各レベルに要求される知識・スキル
 (「特許調査従事者の現状と今後に関する調査研究」INPIT 報告書より抜粋)

基準の択一問題と、パテントファミリー調査スキルを問うことにより、検索に関する基本的な知識・スキルを確認する。

問2. 特許性調査

文章で記載された開発部門からの調査対象技術の理解、技術が属する分類の特定、検索式の策定、適切なスクリーニング、進歩性否定のためのロジック構築等、特許性調査に必要な知識・スキルを確認する。

問3. 侵害防止調査

複数の特許文献の番号が記載されたものについて、ステータス調査による法的状況の正しい理解、権利関係を踏まえた適切なスクリーニング等、侵害防止調査に必要な知識・スキルを確認する。

本大会の特徴の一つであるが、参加者は、実務において普段利用している商用DBを利用して、4時間かけてこれらの問題に取り組んだ。



図4. 特許検索競技大会2012 (東京会場)
 (INPIT ホームページより引用)

2.4 特許検索競技大会2012³

先の調査研究の結果を踏まえ、2012年度からはレベル2のサーチャーに求められるスキル標準に基づき、より実務に即した出題内容に変更した。

全3問の問題構成⁴は下記のとおりである。

問1. 共通問題

検索戦略・検索式・特許分類・知的財産制度・審査

3 INPIT の HP

<http://www.inpit.go.jp/jinzai/kensakutaikai/news2012/index.html>

4 「特許検索競技大会 過去問集」 「特許検索競技大会 過去問集 2012」 (Japio)

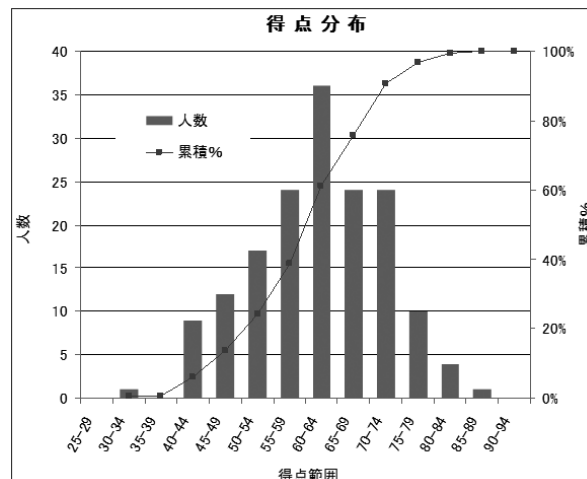


図5. 特許検索競技大会2012の結果
 (「特許検索競技大会 2012 フィードバックセミナーテキスト」より抜粋)

大会の結果は、図5のグラフが示すとおりである。

平均点が62点（100点満点）となり、80点以上の特に優秀な5名を表彰した。

3 特許検索競技大会 2013 について⁵

今年度から IPCC が主催となったが、引き続き、大阪工業大学、一般財団法人日本特許情報機構には、共催として参画していただいている。また、企業や大学等の外部有識者を含む大会実行委員会により運営されている。

本大会の趣旨や運営体制等については、これまでの方針を受け継いでいる。一方で、よりユーザーに魅力のある大会への充実を図るため、いくつか変更を加えている。

3.1 ベーシックコースの新設

特許調査スキルの普及啓発を行うとともにサーチャー人材の裾野拡大を目指し、これまでの大会レベルに相当する「アドバンストコース」に加え、これからサーチャーを目指す方や高専生や大学生、研究者等のレベル1を対象とした「ベーシックコース」を新設した。

出題内容は、以下のとおり。

- ① 一般問題：特許調査に関する知識を問う
- ② 検索問題：IPDLを用いた先行技術調査を行う

例えば、大学等での研究段階から、論文に加えて特許文献も踏まえた研究開発が普通に行われることが、我が国の大学発イノベーションへつながるのではないかと微力ながらその一歩となれればと考えている。

3.2 団体の部の新設

ベーシックコースの新設による裾野拡大も重要であるが、アドバンストレベルのサーチャーに対し、より多くの参加を促し切磋琢磨することも重要である。このため、これまでの個人の部に加え、団体の部を創設した。3名の参加者の得点の合計を団体の成績とし、上位団体を表彰する。

これにより、サーチャーの育成に寄与している各企業、機関等の取組を支援できればと考えている。

3.3 認定証の交付

これまでの大会では延べ650名の参加者に対し、表彰者は僅か27名、4%程度であった。これは、特に優秀な成績の者を表彰対象としていたためである。

今大会からは、ベーシックコース、アドバンストコースのそれぞれにおいて、一定レベルの成績をクリアした優秀な者に、認定証を交付する。

更にアドバンストコースでは、これまで同様、特に優秀な成績の者（個人または団体）に対し、表彰を行う。

これにより、より多くの参加者が、自らの実務能力について客観的な評価を受けることとなる。そして、まずはベーシックコースでの認定証を目指し、次にアドバンストコースでの認定証、更にはアドバンストコースでの表彰へと、モチベーションの継続的な維持・向上につながればと考えている。

4 おわりに

冒頭で少し触れたが、本大会は、関西特許情報センター振興会の50周年記念行事として、企業有志の方々の熱い想いと実行力で開始されたものである。

INPITに引き継がれてからも、その想いを受け継ぎ、外部有識者の方々からなる大会実行委員会が様々な改善をしながら、大会運営に参加してきた。また当時から大会趣旨に賛同しDBを無償で提供いただいている協賛プロバイダーも本大会を育ててきた立役者である。

IPCCは、この熱い意志を受け継ぎ、さらに新たな息吹を吹き込みながら、本大会による特許調査スキルの普及啓発とサーチャー人材の育成を通して、我が国のイノベーションの創出に微力ながら貢献したいと考えている。

今後とも、多くの方のご支援・ご協力を賜りながら、本大会を発展させていきたい。

5 IPCCのHP
<http://www.ipcc.or.jp/contest/2013/index.html>